第十二講　『保元物語』

注(1)新院、母屋(もや)の御簾(みす)を引きほころばして叡覧(えいらん)あり。竜顔頗(すこぶ)る靨(ゑつぼ)に[A]入らせたまふ。注(2)左大臣殿、大床に候(さぶら)ひたまひけるが、遥(はる)かに見出(い)だして、笑みまけて、「注(3)為朝、既に参りて候ふ。実(まこと)にゆゆしき兵(つはもの)にて候ひけり。一人当千とはこれをこそ申し候ふらめ」とて、[B]もつてのほかに御感あり。「為朝、[C]合戦の次第、計らひ申せ」と仰(おお)せ下さる。

畏(かしこ)まつて申しけるは、「為朝、幼少より注(4)鎮西に居住仕(つかまつ)りて、合戦に遭ふ事、既に廿(にじゅう)度に余り、卅(さんじゅう)度に及ぶなり。或いは敵を落し、或いは敵に落さる。しかるに、毎度勝に乗る注(5)先蹤(じょう)を勘(かんが)ふるに、夜討にしかず。天の明けざる先に、内裏高松殿に押し寄せて、三方に火を掛け、一方より攻めんずるに、火を遁(のが)るる者は矢を遁れず、矢を遁るる者は火を遁るべからず。注(6)[D]舎兄にて候ふ義朝ばかりこそ、手甚(いた)く防ぎ候はんずれ。それをば、為朝、真中仕りて射落しなんず。そのほかの奴原(やつばら)をば、太刀(たち)引き抜きて真中に駆け入り、遠からん者をば注(7)さしおよびて、片手打ちに切りては落し切りては落し、薙(な)ぎ落し、払ひ落し、近付く者をば掻(か)い掴(つか)うで、注(8)下げ切りに切りては落し、切りては捨て、或いは頸(くび)捩(ね)ぢ切り、腕(かひな)引き抜き、引き割きなどして、馳(は)せ廻(めぐ)らば、注(9)行疫神はいさ知らず、誰かは面を向ふべき。まして、清

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

盛などがへろへろ矢は、物の数にてや候ふべき。［E］その時、定めて、行幸他所へなり候はんずらん。御輿（みこし）に矢を進（まゐ）らせ候ふべし。これ、為朝が放つ矢にて候ふまじ。天照大神・正八幡宮の放させたまふ御矢にて候ふべし。注(10)駕輿丁、矢に恐れて御輿を打ち捨て奉り、逃げ散り候ひなん。その時、行幸をこの御所へなし奉る事、注(11)時剋を廻すべからず」と、［F］詞（ことば）を放ち、ものげもなくぞ申しける。

（『保元物語』による）

注

(1) 新院――崇徳上皇。第七十五代天皇。保元の乱では弟の後白河天皇と対立した。
(2) 左大臣殿――藤原頼長。保元の乱では兄の忠通と対立した。
(3) 為朝――源為朝。源為義の八男。弓の名手で鎮西八郎を称す。保元の乱では兄の義朝と対立した。
(4) 鎮西――九州の別称。
(5) 先蹤――前例。先例。
(6) 舎兄――実の兄。
(7) さしおよびて――近付いて。
(8) 下げ切りに切り――上から下へ切り下すこと。
(9) 行疫神――疫病神。
(10) 駕輿丁（かよちやう）――輿をかついで運ぶ男。
(11) 時剋（こく）を廻す――時を費やす。時間をかける。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問一　Aを単語に分けて、それぞれ文法的に説明しなさい。

＊解答例〈「書きにけり」の場合〉

カ行四段活用動詞「書く」の連用形「書き」／完了の助動詞「ぬ」の連用形「に」／過去の助動詞「けり」の終止形「けり」

問二　Bのように感じた理由について説明しなさい。

問三　Cの具体的な内容について百字以内で説明しなさい。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問四　Ｄを現代語訳しなさい。

問五　Ｅを現代語訳しなさい。

問六　Ｆから読みとれる為朝の様子・態度について、作者がそう表現した意図をふまえつつ説明しなさい。

Ⓒ RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十二講　復習問題

①「前栽（せんざい）のをかしきなかに歩かせたまひて、『人は草葉の露なれや』などのたまふ。」の傍線部「歩かせたまひて」の「せ」の文法上の説明として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　使役の助動詞の連用形　　イ　サ変動詞の活用語尾
ウ　尊敬の助動詞の連用形　　エ　過去の助動詞の未然形

②「いかにすることにかあらむ、…」の傍線部の文法上の意味として、最も適当なものを、次の中から選べ。

ア　完了　　イ　打消　　ウ　断定　　エ　存在　　オ　過去

③「帰寂したらんにはしかず」の解釈として、最も適当なものを次の中から選べ。

ア　命を捨てたであろうと推測して、それには間違いがない
イ　命を捨てようと決心して、それに迷いがない
ウ　命を捨てようと決心して、それが周囲に知られることはない
エ　命を捨てるならば、それに優ることはない
オ　命を捨てるならば、それほど愚かなことはない

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

④　次の文章を読み、傍線部の意味として最も適当なものを後の中から選べ。

あやしくわびしげなるしづの女が、かたみといふ物をひぢにかけて、菜を摘みてゐざりありくを、「ゆゆしげなるものの姿かな」と見るほどに、…〈以下略〉

ア　たいそう大げさな
イ　たいそう気味悪い
ウ　たいそう気がかりな
エ　たいそうつまらなそうな
オ　たいそうおそれ多い

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十二講　模範解答

問一　ラ行四段活用動詞「入る」の未然形「入ら」／尊敬の助動詞「す」の連用形「せ」／尊敬の補助動詞ハ行四段活用「たまふ」の終止形「たまふ」

問二　弓の名手であり、素晴らしい武士である為朝が味方に加われば、必ず合戦に勝てるであろうと左大臣は確信しているから。

問三　夜討ちにして、内裏に押し寄せて三方から火を放ち、残る一方から攻めて逃げ場を失くし、天皇を他の所へ移動させる時に御輿に矢を放ち、輿をかついでいた男が逃げ出した時に、天皇をこの御所へ連れてくる。（九十五字）

問四　私の実の兄でございます義朝だけが、激しく防戦するでしょう

問五　負けそうになった時、きっと後白河天皇を他の所へ移すでしょう

問六　作者は為朝がとてつもなく強い武士であることを読者に伝える意図をもち、上皇の前で、たくさんの敵を一人で斬り倒し、天皇にも矢を放つという言葉を遠慮もせずに堂々と話す様子や乱暴者でもある態度で表現している。

〈現代語訳〉

崇徳上皇が、ご座所の御簾を引き分けて御覧になる。上皇のご機嫌はたいそう良さそうでいらっしゃる。左大臣殿が、大床に伺候していらっしゃったが、遠くに（為朝を）見つけて、微笑んで、「為朝は、すでに参上しております。（為朝は）本当にすばらしい武者でございます。一人当千とはまさにこの者を（そのように）申し上げるのでしょう」とおっしゃって、これ以上ないほどご感動になっている。（左大臣殿が）「為朝よ、合戦の戦略を、順序立てて申し上げよ」とお命じになる。（為朝が）畏まって申し上げたことは、「私為朝は、幼少の頃から九州に住んでおりまして、合戦を経験したことが、すでに二十回を超え、三十回に及ぶのである。ある時は敵に勝ち、ある時は敵に敗れた。そこで、合戦に勝った前例（の勝因）を分析するにつけ、（今回は）夜討ちに及ばない。夜が明ける前に、内裏高松殿に押し寄せて、三方に火を掛け、（残り）一方から攻めると、火を逃れる者は矢を逃れられず、矢を逃れる者は火を逃れることができません。（私の）実の兄でございます義朝だけが、激しく防戦する

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

でしょう。その義朝を、私為朝が、（甲の）真ん中を射て必ず射落とそう。その他の雑兵たちを、太刀を抜いて（軍勢の）中央に駆け入り、遠くにいるような者に近づいて、片手打ちにして斬っては落とし斬り捨てて、薙ぎ倒し、払い落とし、近づく者を引っつかんで、上から下に斬り落とし、斬り捨てて、あるいは首を捻じ切り、腕を引き抜き、引き割きなどして、（戦場を）馳せ回るならば、疫病神はいざ知らず、いったい誰が（私と）まともに戦うことができるか、いや、できない。まして、清盛などの（勢いのない）へろへろ矢は、物の数ではございません。その時、きっと、天皇を他の所へ移すでしょう。（その時に）御輿に矢を放ち申し上げましょう。これは、私為朝が放つ矢ではないでしょう。天照大神や正八幡宮が放ちなさる御矢でございましょう。御輿をかついで運ぶ男たちは、矢を恐れて御輿を棄て申し上げ、きっと逃げ散るでしょう。その時、天皇をこの御所へお連れ申し上げることは、時間をかけてはならない」と、言葉を放ち、遠慮もなく申し上げた。

〔重要単語〕

○ゆゆし…①**おそれ多く慎まれる**。②忌まわしい。**不吉だ**。③たいそうである。④**すばらしい**。⑤ひどい。⑥気味が悪い。⑦勇敢だ。

○みゆき【行幸】…**天皇のお出かけ**。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第十二講　解答解説

〔解説〕

①　「せ」の上が未然形で語尾が**a**段なので、**助動詞「す」**。**真下**に「たまひ」と**尊敬語がある**ので、**上**をざっと確認すると使役の対象の「〜に」がない。さらに、接続助詞「て」で続いていき、直後のセリフの』の下が「のたまふ」と尊敬語になっており、「せ」を尊敬で訳してもおかしくない。よって、正解はウ。

②　「に」の**上**が**体言**で、**下**に「**あり**」があることから、「**断定**」の「に」。よって、正解はウ。「あり」が敬語になっていても気づけるように。

③　「**〜に**（は）**しかず**」は「**〜に及ばない**、**〜のほうが良い**」の意味。よって、その解釈ができているエが正解。

④　「ゆゆし」は**多義語**なので、傍線部の**前後**をきちんと確認すること。本文に「あやしくわびしげなる」とマイナスの言葉が前にあるので、この「ゆゆし」もマイナスの意味。「ゆゆし」のマイナスの意味は「不吉だ・気味が悪い」など。よって、正解はイ。

〔解答〕

①　ウ　②　ウ　③　エ　④　イ

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。